

◆第1回キャリア教育講演会

- 1 日時 平成22年6月23日(水) 14:30～16:10
- 2 対象 本校生徒、職員、保護者のみ
- 3 講師 舞の海秀平氏(スポーツキャスター)
- 4 演題 「私の相撲人生」
- 5 講師紹介

身長が低いためプロ入りは考えず、大学卒業後は山形県の高校教師に内定していたが、子どもの頃からの夢を叶えようと、周囲の反対を押し切ってプロ入りを決意。1990年5月、出羽海部屋に入門。90年春場所での新弟子検査は身長が足りずに不合格。頭にシリコンを入れ、夏場所の新弟子検査に合格した話はあまりにも有名。小柄ながら初土俵から連続5場所勝ち越し、91年春場所で十両に昇進し、四股名を舞の海に改名。同年秋場所新入幕。94年秋場所新三役。99年11月場所引退を決意。現役時代、小兵ながらその技の豊富さから、“技のデパート”と呼ばれ、相撲ファンのみならず、多くの人を魅了し続けた。技能賞5回、日本フェアプレー賞受賞。幕内通算241勝287敗。2000年5月27日、東京・両国国技館にて断髪式を最後に引退。現在は、スポーツキャスター・情報番組・ドラマ等で活躍中。





講演要旨

「私の相撲人生」という題で、現在の仕事の裏側や小学校時代から現役を引退するまでの相撲人生について、ざっくばらんに講演をされました。

現在、大相撲の解説者やニュースキャスターを務める中で、先生自身の心がけとして「素晴らしい相撲だった」「良い相撲だった」という単純な表現はできるだけしないようにしていること、また、「スーパーニュース」では、コマーシャルが始まる時間が決まっているために、そこまでの残り数秒をどう話すかが非常に難しいことなど、普段私たちがTVを見ているだけではわからない舞台裏を知ることができました。

そして、相撲が盛んな青森県に生を受けた後の自身の相撲人生について詳しく話をされました。小学校時代は体が小さかったにも関わらず多くの相撲大会で優勝し、「相撲では一番になれる」という思いが募っていったために相撲をやっていくことを決めたそうです。しかし、中学時代には周囲の部員たちがどんどんからだが大きくなっていき、勝てなくなったために相撲を辞めようと思いましたが、監督の先生が校門で毎日待ち伏せをしていたために辞めることができなかったそうです。高校でもやはり厳しいしごきのため、辞めたくて仕方がなかったが怖い監督のため、辞めることができなかった。しかし、卒業後、「その時に相撲を辞めていたら現在の自分はない」ということを考えるようになり、先生方に対する感謝の気持ちがどんどん大きくなっていったとのことでした。

日本大学時代は、増量するためにとにかくたくさん食べ、食べた後に下を向くと戻ってしまうので、何人前も食べた後は上を向いていたそうです。しかし、そうやって体重が増えると、土俵で「残れる」ようになり、残れるとまわしを取れるようになったために、練習が楽しくなり、自分から練習に取り組む気持ちが強くなっていきました。「自分から進んでやる練習は成果が上がる」ということを強調されました。卒業2ヶ月前までは教師になる予定でしたが、プロ入りを決意したのは後輩の突然の死によるものでした。後輩の突然すぎる死によって、「人生」を真剣に考えるようになり、夢であった大相撲へ挑戦しようという気持ちが大きくなっていきました。

1回目の新弟子検査では身長が足りず、悔しい思いをしたが「相撲には小さい人でも勝ち方がある」ということを証明したい気持ちが高まり、2回目の新弟子検査の前に頭にシリコンを入れることを決意しました。しかし、手術前はシリコンを入れることを軽く考えていたそうですが、実際に手術では頭の皮をはがし、袋を入れ、その袋に1ヶ月かけて少しずつ水を注入していきました。その時の激痛と皮の張りが口では言い表せないほどのすごく辛かったそうです。

大相撲入りしてからのエピソードでは、曙関との取り組みにおいて、以前より巡業中の申し合い稽古から暖めてきた秘策をつかい、三所攻めで倒したことを話されました。相撲を取る時、常に「相撲は大きいから強いというものではない。自分の強い所を相手の弱い所にいかにぶつけていくか」を考えていたとのことでした。

終始、和やかな雰囲気の中で講演をされ、最後には自ら質問を受け付け、生徒たちも積極的に質問をし、沢山の保護者の方々も熱心に聞き入っていました。

第2回キャリア教育講演会

- 1 日時 平成22年11月1日(月) 14:30～16:10 於、本校第1体育館
- 2 対象 本校生徒、職員、保護者のみ
- 3 講師 吉村作治氏(工学博士・サイバー大学学長)
- 4 演題 「夢を実現したい君たちへ ～君たちのエジプトを見つけよう～」
- 5 講師紹介

1966年アジア初の早大エジプト調査隊を組織し現地へ赴いて以来、40年以上にわたり発掘調査を継続、数々の発見により国際的評価を得る。2005年1月には青いミイラマスクを付けた未盗掘・完全ミイラ「セヌウ」の木棺を発見、そのミイラマスクを含む発掘40年の成果を、2年間にわたり日本全国の博物館で巡回展示し、大好評のもとに終了した。さらに、2007年10月にはエジプト学史上非常に珍しい「親子のミイラ」が埋葬されている未盗掘墓を発見し、大きな話題となった。現在、エジプトで発掘したその木棺などと、カイロ博物館所蔵品と一緒に紹介する展覧会を日本全国で巡回展示中。2007年開校の、株式会社立で日本初・完全インターネット講義による『サイバー大学』初代学長に就任。2009年2月には、ラムセス2世の孫王女の墳墓を新たに発見した。2009年秋より本格的に始まった、古代エジプト最古の大型木造船「第2の太陽の船」を発掘・復原するプロジェクトも注目されている。「ミイラ発見！！－私のエジプト発掘物語－」他、著書多数。公式HP:「[吉村作治のエジプトピア](#)」



講演要旨

吉村先生の生い立ちから現在の取り組みについてのお話をいただいた。

年間30校ほど高校の講演会で話をする機会があるということで、随所に高校生に向けてのメッセージを盛り込んだ講演となった。

小学校4年生(10歳)の頃に『ツタンカーメン王の秘密』を読んで、「20世紀にこのようなものを見つけられる国って、どんな国だろうか」とエジプトに行ってみたくなり、それがきっかけで現在の仕事に進んだとのこと。小学校の先生から、「エジプトに行くには、エジプト考古学者にならないといけない」と言われ、夢が決まったよう

だ。

早稲田大学を休学して22歳でエジプトのカイロ大学で学ぶも、アラビア語が難しいためにカイロ大学の教授から「一回早稲田大学に戻り、カイロ大学の大学院に戻ってきなさい。(大学院では英語で授業が行われるということだった)」というアドバイスをもらう。

「エジプトでツタンカーメンの墓のようなものを見つけたい」という不確かな夢に生きた吉村先生は、『プロジェクト・マネージメント』や『ロード・マップ』を作ることの大切さを説かれた。発掘を行うにも、①総額いくらかかるのか ②資金はどこから調達するのかなど、将来やることの全体像を描き、収入を確定しないと支出も決まらずに行動にうつせないという話をされた。先生は文部省(当時)からの補助金を得て発掘調査を行い、現在に至るまで40年間もその補助金は継続しているそうだ。「国からの援助を受けて調査をしている『誇り』があるからこそ、調査をがんばれるのだ」という話が印象的だった。

新聞記事などで自分の調査に役立つ情報があれば、すぐに問い合わせで自ら確認に出向くという行動力がすごい。そのおかげで電磁波探査の調査法を確立させて、「第2の太陽の船」の発見につながっていったという話に、生徒も釘付けになっていた。夢の実現のためには「先進性」を身につけると同時に、「常識」などの力をつけることも大切であるとのアドバイスがあった。有名人との会話のくだりでは、「あの世」がないことを力説して科学者としての顔をのぞかせた。「一度死んだら戻って来られない」というメッセージとともに、「自分の進路を大学4年間でしっかりと考えるなんて、遅すぎる」「高校のうちにやりたいことをしっかりと考えておく」というアドバイスもいただけた。

最後は、スライドを用いて「エジプトツアー疑似体験」をすることができた。先生のガイド付きという贅沢な時間を過ごすことができた。

質問コーナーでは、3年生から「ミイラになるにはどうしたらいいですか」とか「映画でよくあるように、考古学者は危険な目に遭うが、先生はいかがでしたか」などの質問にも気さくに答えて下さった。「ミイラの作り方」を聞いた生徒たちは、一生忘れないことだろう。

冗談交じりの90分間の講演だったが、悠久のエジプトへと誘われていって、時間が経つのも忘れてしまうほどだった。

第3回キャリア教育講演会

1 日時 平成23年3月22日(火) 13:30～15:10 於、本校第1体育館

2 対象 本校生徒、職員、保護者のみ

3 講師 木下晴弘氏(株式会社アビトレ 代表取締役社長)

4 演題 「君たちに伝えたい幸せの法則」

5 講師紹介

1965年、大阪府生まれ。同志社大学卒業後、銀行に就職するが、学生時代大手進学塾の講師経験で得た充実感が忘れられず、退職して同塾の専任講師になる。

生徒からの支持率95%以上という驚異的な成績を誇り、多数の生徒を灘高校をはじめとする超難関校合格へと誘う。

その後、関西屈指の進学塾の設立・経営に役員として参加。「授業は心」をモットーに、学力だけではなく人間力を伸ばす指導は生徒、保護者から絶大な支持を獲得。

以後10年間にわたり、講師および広報・渉外・講師研修など様々な業務を経験。現在、株式会社アビリティレーニングの代表取締役として、全国の塾・予備校・学校で、講師・教員向けの授業開発セミナーを実施している。セミナー受講者は10万人を超え、大きな注目を浴びている。



講演要旨

今回の講演は「君たちに伝えたい幸せの法則」という題で話をされた。その内容は、講師の木下晴弘先生が大学時代に塾でアルバイトをしていた時に会った「おじいちゃん」に聞いた話であるということであった。

その「おじいちゃん」は「幸せはいつも考えないもの」と言っていたそうである。そこで木下先生は、「なぜ」を繰り返すと物事の本質が見えてくると考え、塾の生徒の保護者たちに「なぜお子さんに勉強して欲しいのか」という問いから始まる「なぜ」を繰り返して、その本質を問うたそうだ。すると、一律に「幸せになってほしいから」という答えが返ってきた。そして「幸せとはどんな状態か」という質問を重ねてすると、「健康で、ある程度お金があって…世の中の役に立ち、人から慕われて…みんなから感謝されて…愛する人に囲まれ、笑顔のあふれる人生を送ってくれば…」という内容の答えが同じように返ってきたということだ。そのような回答を参考に、「幸せ」とは、「感謝・お金・信頼」と定義することにしたとのことである。

そして木下先生は、多くの教え子に連絡してこの定義の「幸せ」を得られているかということを確認すると「得た人」と「得られていない人」と真っ二つに分かれたという。その理由を敢えて考えると、「他人を喜ばせた人」と「自分が喜ばたい人」ということに分けられるということが分かった。そのことから木下先生は、以前「おじいちゃん」が「人に与えたものは、必ず自分に返ってくる」と言っていた「人生の法則」が理解できたという。

また、目的は「何のために」ということであり、目標は「何をを目指す」という違うものであるという違いを話された。目的の例として、「いい学校に入る・就職する・教師になる・お金持ちになる・住む人の幸せ・社会の正義を守る」という6項目を挙げられた。しかし、前の3項目は目的に終わりがあるが後の3項目は目的に終わりがないということを話された。特に、終わりのない目的の中の「住む人の幸せ・社会の正義を守る」という2項目は、他人のことを考えて幸せにするものだから大切にしなければならないという考えを話された。

次に、自尊心と同時に他尊心(敬意・感謝・愛)を大切にすることの重要性を説かれた。江戸時代に確立した他人に対する敬意を重視する武士道が、ロシアバルチック艦隊撃破に繋がったことを例に挙げ、自己を承認すると同時に他者を承認することの大切さを話された。「他に感謝しないで何に感謝するんだ」と強く話され、「幸せはなるものでなく気づくもの、幸せに気づけばあなたはもう幸せです」と結ばれた。

また、幸せを導くための方法としてプラスの言葉を発することの大切さを話された。脳内にはミラー細胞というものがある、他の人の表情などをそのままイメージするという。だから、否定的な言葉を使うと否定的な気持ちになるから遣わない方がよいということも話された。

最後に、5歳の時にメジャーリーガーになりたいという夢を持ったが、6歳の時に片腕を失ったピート・グレイについての話をされた。片腕を失ったにも関わらず、メジャーリーガーになる夢を諦めなかったそうである。結局

30歳でメジャーリーグとしてデビューし三振に倒れたが、観客はスタンディングオベーションを贈ったという。このことから、木下先生は目標設定のためには、be(自分の存在理由・夢・目的)・do(かなえるためにすべきこと)・haveを持つこと、諦めないということの大切さを説かれた。

以上が今回の講話の概要である。木下先生の講話は学生時代の話から始まって、悩んでいたときに紹介された「おじいちゃん」が話してくれたことを我々に伝えるというストーリー性に富んだものであった。木下先生の流暢な関西弁がそのストーリー性を一段と劇的なものとしていた。講話の内容を盛り上げるための視覚的要素や音響効果が実に効果的であったということも特筆すべきことである。生徒たちが今回の講話に聴き入っていたことがそれをよく物語っていた。